

日本人の死生観

台湾国立政治大学副教授 徐 翔生

死の捉え方や受け止め方に関する観念、つまり死生観は、その国の思想文化のあり方に強い影響を受けている。例えば、中国では儒教や道教の考え方を背景に、何よりも生を重んじ、死に無関心な態度を示している。一方、中国とは対照的に、日本では古くから死の問題に関心があり、死に深い興味を示してきた。日本人は死の問題を避けるどころか、時には死を高度に肯定し、また場合によっては死を美化することすらあった。それでは日本人のかかる死生観を、われわれはどのように評価することができるのであろうか。まず、本報告では、『古事記』『平家物語』『葉隠』『曾根崎心中』を取り上げ、その中に表われている死の思想を考察しながら、古代から近世までの日本人の死生観がどのような形態をとってきたかを明らかにする。次に森鷗外の『興津弥五右衛門の遺書』、夏目漱石の『ころも』、芥川龍之介の『将軍』、司馬遼太郎の『殉死』などを取り上げ、その中に見られる死の思想を検討しながら、近代に入ってから日本人の死生観がどのように変化したのかを論じる。最後に現代日本人の死生観から、日本人の死に対する独自の観念について論及し、これが中国人にどのような示唆を与えるのか、その展望を述べたい。

本報告が日本人の死生観の究明に留まらず、多文化共生社会に向けた、台湾における死生観の研究に少しでも貢献することができれば幸いである。